

平成29年度「水・土壌環境保全活動功労者表彰」受賞者一覧(敬称略)

推薦者	団 体	個 人	主 な 功 績
岩手県	イワテチョウリツミスホリショウガッコウ 岩手町立水堀小学校 リバーキッズクラブ		・水堀小学校児童31名が、北上川の源泉に住む人間として、北上川に対して誇りを持ち、大切に守っていかうという心を育むことをねらいとして、平成12年から活動を継続している。 活動内容は、年2回の「クリーン作戦北上川」として、北上川の源泉「ゆはずの泉」、「御堂新田の滝」、「川の駅」、学校周辺を地域住民等と協力しながら清掃している。 ・さらに、「ゆはずの泉」に関する知識を深める学習、「御堂新田の滝」の水生生物調査、北上川中流域及び河口域の見学、宮城県石巻市立北上小学校との交流等、活動開始当初から環境保全学習に精力的に取り組んでいる。北上川源泉から北上川河口まで北上川流域全体を環境学習の対象としており、児童は源泉の環境を保全することの大切さを理解し、活動を継続している。
山形県	イイデチョウリツテノコショウガッコウ 飯豊町立手ノ子小学校		・平成18年度から白川ダムビジョン推進会議の事業に併せて授業の一環として置賜白川流域の水質調査と水生生物調査を行い、地域の水質や環境について学び「地元愛」を育成している。 ・なお、今年度の8月26日に県開催の最上川防災フェアにて「白川ダム1日管理所長」としてダム施設やダム湖について学んだことを発表している。
茨城県	イバラキマチカテイハイスイタイサクキョウギカイ 茨城町家庭排水対策協議会		・昭和60年の設立以来、涸沼及び茨城町全域の流入河川の水質の現状について理解と認識を深め、水質浄化を図るための家庭排水の適正な処理を推進し、環境の改善に向けて広く町民への啓発活動を行っている。 ・具体的には、涸沼湖岸において毎年12月に清掃活動を、巴川及び黒川において年2回の水質調査を、町民祭等においてパネル展示や水切りネット配布などの啓発活動を実施している。
埼玉県	トクテイヒエイリカツドウホウジン 特定非営利活動法人 コシガヤ 越谷ふるさとプロジェクト		・大相模調節池(自然再生ゾーン)の維持・保全活動をまとめ、広報誌を作成(平成20年～ 継続) ・大相模調節池を拠点に、子どもに科学に対する興味を持ってもらうため、子ども科学教室を実施(平成25年8月～ 継続・毎回3日間) ・越谷市内の小学生を対象とした、川をめぐる子ども体験バスツアーを実施(平成28年8月:ムサシトミヨを知ろう～絶滅危惧種ムサシトミヨの保護育成について～、平成29年9月:オニバス自生地での研究) ・越谷市内の地区センターと協働し、小学生を対象とした生物・科学教室を実施(平成29年6月:大相模調節池の生き物調査:平成29年7月:昆虫の研究) ・県内他団体と協働し、ニホンウナギをはじめとした水生生物をモニタリングするためのツール「石倉カゴ」を大相模調節池に設置して、生き物調査を実施(平成29年9月)
埼玉県	ミサト カフ 三郷の川をきれいにする会		・月1回程度の市内河川の清掃を行うとともに、水質調査を行っている。 ・また、市民向けの河川に関する講習会や環境イベントなど、市主催のイベントに協力し、市の環境保全の啓発に尽力している。

推薦者	団 体	個 人	主 な 功 績
富山県	フカイ 環の会		<p>・活動の一環として、将来を担う児童に対し、環境の大切さを学ぶとともに地元へ愛着を持ってもらうことを期待して、「水辺のすこやかさ調べ」を活用した体験型の学習会を実践している。これまで、庄川、小矢部川水系14河川、上庄川、谷内川、旧六ヶ用水、新開川、清水川、千保川の21河川のほか、弓の清水などで調査しており、参加した児童は、魚や鳥・動物などを見つけたり、川との関わり合いや自然の大切さを深く理解させる機会となっている。</p> <p>調査結果はわかりやすく冊子にまとめ、小学校や環境イベント等で配布しているほか、図書館にも提供し、インターネットでも閲覧できるなど、積極的に情報発信を行っている。活動している様子は新聞やケーブルテレビにも取り上げられ、その活動は広く知られているところであり、県民の環境意識の向上に大きく貢献している。</p>
長野県		マツザワ カツリ 松沢 克典	<p>・長野県環境保全研究所の前身である衛生公害研究所から研究所に勤務し、当時、同県で大きな課題であった生活系排水対策として、下水道処理区域外での家庭雑排水による汚濁負荷の削減に対して、簡易沈殿槽、小型ばっ気、植物処理装置(植栽水路)、雑排水単独処理施設、土壌浸透処理などの処理技術について、機能調査などの調査研究に取り組むとともに、流域下水道整備をにらんだ工場、事業場での排水処理技術や排水処理施設の流入・流出水質の実態及び排水量原単位に関する基礎的研究を行った。</p> <p>・また、そのような活動の後、平成19年度～20年度には同県環境保全研究所の次長兼企画総務部長として研究所の企画運営に当たるとともに、後進の指導・育成にも努めた。</p> <p>・さらに行政分野においても水環境保全や水質浄化のための事業に尽力した。</p> <p>以上のように、同県の水・土壌環境保全に大きく貢献した。</p>
静岡県	カトウガクエン ヨウトウガッコウ カガクブ 加藤学園高等学校 化学部		<p>・沼津市内の河川環境を調査し、水質汚染の原因が下水処理場で有機物が分解されて発生する窒素や燐の流入によるものとの結論に至った。河川等の富栄養化を防ぐために、ペーパースラッジを用いた処理剤を作製し、窒素と燐の大幅な減少に成功した。処理剤に用いたペーパースラッジは、産業廃棄物として処分されるものであり、ペーパースラッジの有効活用の観点からも、本処理剤の作製は有意義なものである。</p>
愛知県		オグラ カズミ 小椋 和美	<p>・平成21年4月に生活排水クリーン推進員に着任し、以降8年半にわたり地域の生活排水対策に係る啓発活動において中心的な役割を担っている。</p> <p>地元森岡自治区の地域住民や他の地区の生活排水クリーン推進員と協働して、廃食用油を使用した石けんづくりを自ら実施する他、夏休み期間には、小学生とその親子を対象として石けんづくりや洗剤を必要としないアクリルたわしづくりの講座を開催している。</p> <p>・また、市民活動センターのイベントにおいて、ブースを出展し、自ら作成した生活排水対策に関する動画を放映するなど、生活排水について興味を持ってもらうための新しい啓発内容を考えて実施している。</p> <p>・さらに、製作した石けんを水切りネットや啓発リーフレットと合わせて地域の清掃活動(ゴミゼロ運動、クリーン・アップ・ザ・ワールド・イン大府等)の際に配布し、家庭でできる生活排水対策の啓発を実施している。</p> <p>この他にも、市で主催する生活排水クリーン推進員の研修会や放課後クラブでの出前講座においても、講師として生活排水に関する講義をするなど、知識経験も豊富であり、市の生活排水対策の担い手として重要な役割を果たしている。</p>

推薦者	団 体	個 人	主 な 功 績
愛知県	シミン カンキョウカイギ へきなん市民環境会議		<ul style="list-style-type: none"> <li>・碧南市環境基本計画の推進を目的として設立後、環境に関する活動を継続して実施している。愛知県及び碧南市等が構成員となっている「油ヶ淵水質浄化促進協議会」が実施する「油ヶ淵流域水環境モニタリング」に参加し、流域5地点の水質調査を毎月1回実施して水環境の実態等の把握に努め、水環境保全に貢献した。</li> <li>・また、独自活動の「流域モニタリング」においても、臨海部、河川計4地点の水質調査を毎月1回実施して水環境の実態等の把握に努め、水環境保全に貢献した。</li> <li>・市や他の団体が開催する啓発イベントへの出展や啓発物品の配布等を通して、水環境保全の啓発普及に貢献した。</li> </ul>
徳島県	アナン シリツ ツバキマチチュウガッコウ 阿南市立椿町中学校		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校裏の海岸において、全校生徒が学校行事として清掃活動を実施し、海岸漂着物の回収による海岸環境の保全に貢献している。</li> <li>・また、校区内の蒲生田海岸において、全校生徒が地域活動として海岸清掃活動やウミガメの保護観察を実施することで、地域における水環境保全・普及啓発に貢献している。</li> </ul>
徳島県	ミマ シリツ コヤダイラチュウガッコウ 美馬市立木屋平中学校		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校近くを流れる「穴吹川」で、毎年夏に全生徒が参加し、近隣の小学校とも合同で川の水質や水生生物を調査するなど、地域の水環境保全・普及啓発に貢献している。</li> </ul>
香川県		ニシタニ アキラ 西谷 明	<ul style="list-style-type: none"> <li>・底びき網漁業者として長年に渡り、操業中に網に掛かった海底ごみを持ち帰り、海中環境の美化に尽力している。</li> <li>・平成23年度に県が海底ごみの実態調査を行った際には、地域の漁業者の窓口として主導的役割を果たした。調査の結果海ごみの問題が明らかとなったことで、操業時に海底ごみを持ち帰る漁業者が増え、平成28年度は地域の漁業者が約1.4トンの海底ごみを回収した。</li> <li>・また、地域住民や修学旅行生を対象とした水産学習会で、自ら回収した海底ごみを用いて海ごみ問題の深刻性を訴え、水環境保全に関する啓発活動を行っている。</li> </ul>
香川県	タカマツ シリツ リツリンショウガッコウ 高松市立栗林小学校		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校付近の川の水質検査や県が「残したい香川の水環境50選」に認定している栗林公園の水環境について様々な学習を行い、学んだことを発表し理解を深めている。また、総合学習として長年積極的に活動に取り組み、水環境保全の学習・啓発活動に貢献した。</li> </ul>

推薦者	団 体	個 人	主 な 功 績
福岡県		ヒロシロ ヨシナリ 広城 吉成	<p>・平成元年に九州大学教員となって以来、一貫して地域の水環境保全および健全な地域水循環系の維持・改善に大きく貢献した。特に専門分野でもある地下水水質および地下水量の保全に大きく貢献した。</p> <p>(1)九州大学伊都キャンパスにある「幸の神(さやのかみ)湧水」の湧水量を減少させないために、どのエリアを地下水涵養域にすべきかの検討を行った。また、湧水量の変動についてモニタリングを行っている。)</p> <p>(2)平成14年に土壤汚染対策法が成立したのちは、福岡市、九州大学の土壤汚染問題や地下水汚染問題の解決に向けて適宜助言を行った。</p> <p>(3)平成元年、九州大学助手に採用されて以来、一貫して水・土壤環境保全の保全に関する学術研究および研究開発に従事し、多くの有用な知見を公表した。</p> <p>(4)平成13年より、九州大学伊都キャンパス周辺地域において、地下水の塩水化問題、とりわけ地域の農業用地下水の確保を図るため、元岡地区農業用地下水対策委員会が関係機関たる福岡市、福岡市土地開発公社、九州大学、地元灌水組合等の意見調整を図るため設立され、水対策発動の要否の検討を行う条件を定めるとともに、水質変化の原因究明と水対策発動の要否等の検討を行ってきた。平成29年3月には福岡市、九州大学、地元灌水組合の三者の合意のもと、本委員会の発展的閉会を迎えることができた。</p> <p>(5)福岡市の今津干潟懇話会委員として今津干潟の保全に向けて平成17年より水・環境行政の助言を行ってきた。</p> <p>(6)九州大学の移転に伴い、移転先である新キャンパス(現、伊都キャンパス)の水環境、地下水環境、水循環解析等を事前に行い、キャンパス周辺住民への地下水取水障害が起こらないよう、水環境保全に大いに貢献した。平成20年4月から平成29年3月まで、九州大学の移転先(伊都キャンパス)に係るすべての環境問題に対処する「環境ワーキンググループ」のグループ長、その上位委員会である「環境監視委員会」副委員長として環境修復、環境維持、環境改善に取り組んできた。また、毎年、九州大学統合移転事業環境監視調査を行い、調査報告書を作成し、環境省、福岡県、福岡市、糸島市に報告・送付した。</p>
佐賀県		タケトミ タカコ 武富 孝子	<p>・平成13年度より家庭用の合成洗剤から天然素材の粉洗剤へ転換を図るため、泡立ちが良い『トトロ石鹸作り』を各地域で講話と実践活動及び指導者育成を行うことで水環境保全の啓発普及に貢献している。</p> <p>・平成16年度頃より、小学生等の環境学習として毎年5回程度、微生物の発酵を利用したどろ団子作り及び放流で河川浄化を実施し、環境教育及び水環境保全の啓発普及に貢献している。</p> <p>・10年以上において鹿島市環境衛生推進協議会の役員として、市内水路の水質調査・実態把握に取り組み、効果検証を行うことで水環境保全に貢献している。</p> <p>・平成25年度より年1回、河川等へのプラスチック製品の漂着ごみ等をテーマとした環境にわか(佐賀弁の寸劇)を、鹿島市環境衛生推進協議会の他の役員とともに考案・上演することで水環境保全に大きく貢献している。</p>
大分県	スミヨシガワ ジョウカタイサク スイシンキョウギカイ 住吉川浄化対策推進協議会		<p>・流域4町内会が参加する一斉清掃を年1回実施。 流域9町内会が参加する下流域の一斉清掃を2年に1回実施。 啓発用広報誌「住吉川だより」を年2回発行。 年1回「住吉川ウォーキング」を開催。流域住民と歩きながら住吉川を観察し、さらなる浄化に向けた意識を高めている。</p>

推薦者	団 体	個 人	主 な 功 績
環境省 水・大気 環境局 土壌環 境課		マツシタ タカシ 松下 孝	<p>・平成18年度から今日まで11年余にわたり、土壌汚染対策法の指定支援法人である日本環境協会の専門相談員を務め、この間土地所有者、指定調査機関、地方自治体等からのおよそ1千件の照会・相談に応じ、土壌汚染対策の適切かつ円滑な実施に貢献している。</p> <p>・また、環境省が実施している「低コスト・低負荷型調査対策技術調査」のプログラムオフィサーを平成23年度から今日まで毎年度務め、低コスト・低負荷型の土壌汚染の調査・対策に資する実証試験段階の技術の開発の促進にも尽力している。</p>

団体 12

個人 6

合計 18